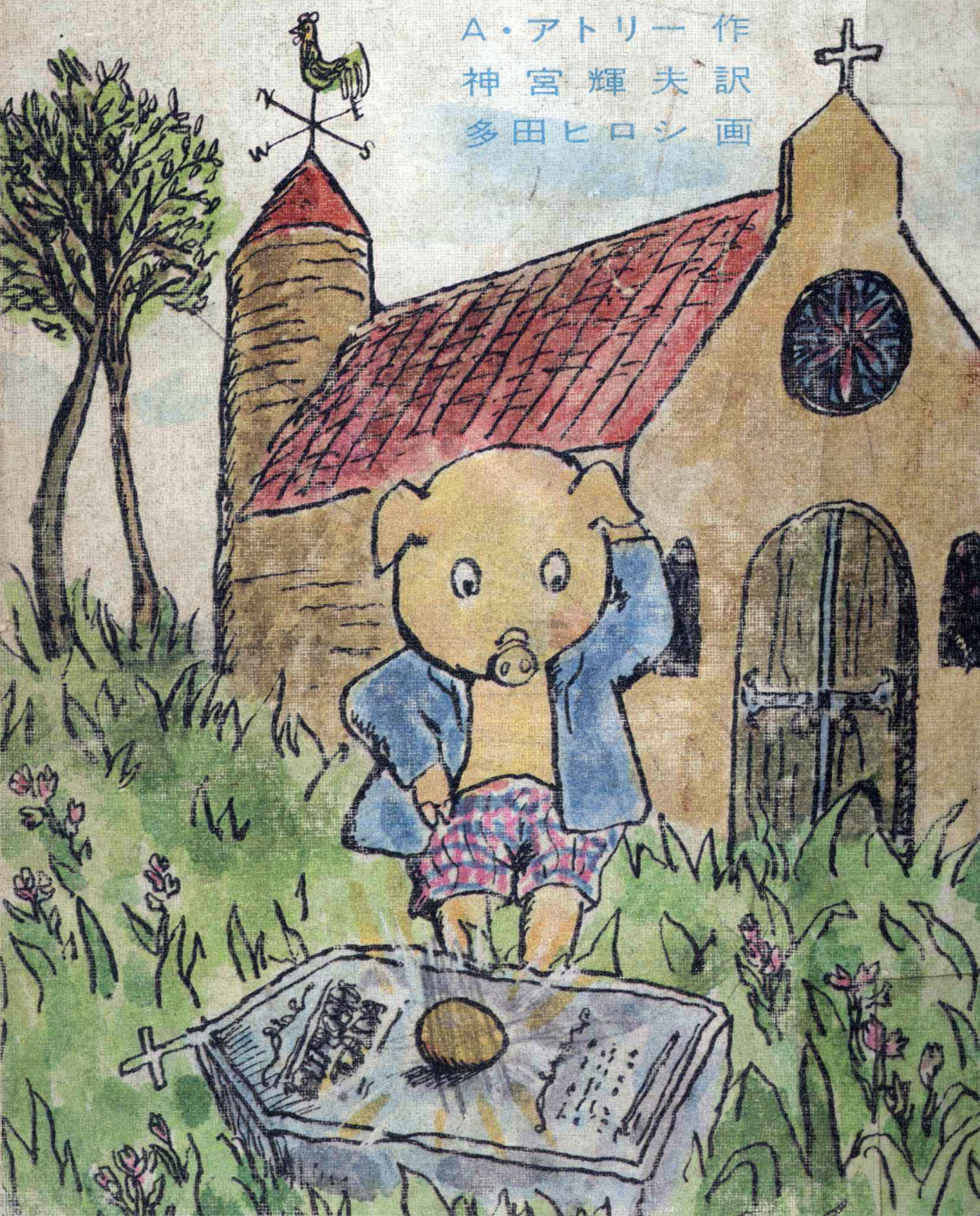


サム・ピッグのおおそうどう

A・アトリー 作
神宮輝夫 訳
多田ヒロシ 画



アリソン・アトリー作

A 5 版 192 p 定価 450 円

チム・ラビットのぼうけん

石井桃子訳・中川宗弥画

チム・ラビットのおともだち

石井桃子訳・中川宗弥画

サム・ピッグだいかつやく

神宮輝夫訳・多田ヒロシ画

サム・ピッグおおそうどう

神宮輝夫訳・多田ヒロシ画

NDL 933 192p 21 cm © 1967

チムとサムの本

サム・ピッグおおそうどう

一九六七年七月一日 初版発行

定価 四五〇円

神宮輝夫

株式会社 童心社

東京都新宿区四谷二ノ九
電話 (三五二) 〇四八六
振替 東京 七五五〇四

中教印刷株式会社

幸英社印刷有限公司

有限会社 松栄堂製本所

活版印刷

平版印刷

製本

チムとサムの本・童心社

サム・ピッグおおそうどう

アリソン・アトリー作

神宮輝夫訳・多田ヒロシ画



も
く
じ

1 サム・ビッグの きゃんぷ

9

2 サム・ビッグの たまご

46

3 サム・ビッグと こびと

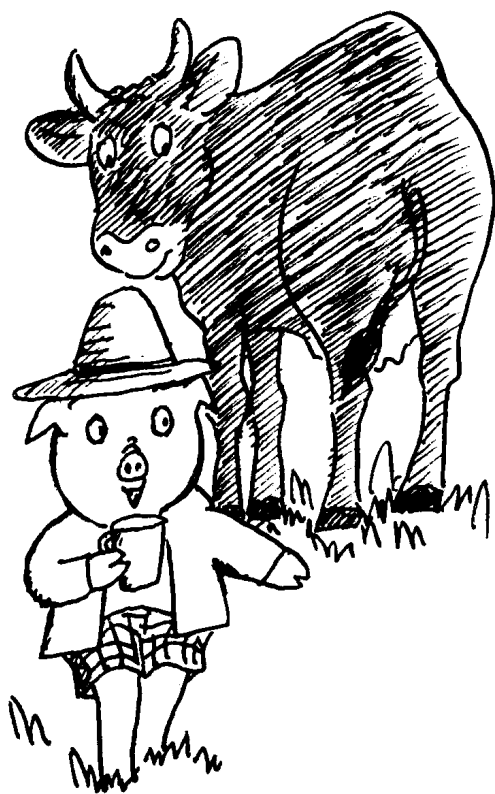
64

4 たからもの

5 サム・ビッグのべっど

6 サム・ビッグとこだま





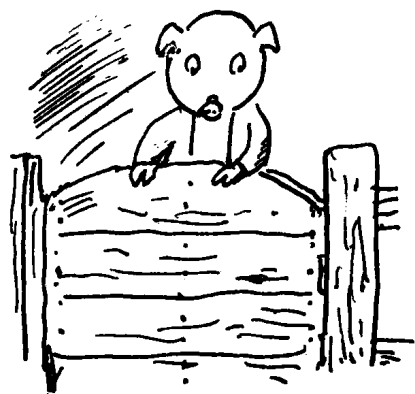
サム・ピッグの きゃんぷ



みなさんは、おぼえていらっしやるで
しょう。ずっとまえのこと、四ひきの小
ぶたが、友だちでおとうさんがわりの
ブロックさんというあなぐまといっしょ
に、一けんの小屋にすんでいました。小
ぶたたちがすんでいる小屋は わらぶき
やねで、やねには べんけい草がはえて
いました。まどには ひなぎくのもよう
のついた 白いかしてんがかかっていま
した。アンは、風とおしがよいように、
いつもまどをあけはなしておきました。
みんながごはんをたべるおかつてには、
ひくいすと、ブロックさんがすわる

ゆりいすがありました。しきものは、とうしん草と、はっぱのついた ぶなの
小えだでつくってありました。小ぶたたちの家は、いつもみどりがあつて す
がすがしいかんじでした。たべものべやには、石でつくった ほそながいはこ
があり、その中に、りょうりがかりのトムが、おいしいものを どっさりいれ
ておくのでした。にんげんの家の とだなのやくめをするそのには、しゅ
ーくりーむ、あつぶるばい、かたくなったばん、あじつけ用の草をまぜた み
どり色のまるいちーずなどが はいっていました。

あさごはんがすむと、アンねえさんは、べつどを
せいとんしたり、もうふをばたばたふって ほこ
りをはらったりしました。トムは、小えだのたく
さん ついた かぼのえだのほうきで、家のなかや
にわをはきました。やさいつくりをするビルは、は
たけをたがやしに いきました。ところが、小さい



サム・ピッグは、にわ木戸^{きど}までかけだして行って、木戸^{きど}をおしたりひいたりしてあそびました。木戸^{きど}のちようつがいはさびていて、ぶたがなくのとそっくりにきいきいいうので、とてもおもしろいのです。

しごとがおわると、四ひきの小ぶたは、戸^とをしめて、野原^{のほら}までかけていき、きのこをさがしたり、らっかせいや、しょうろや、かんぞうをほったりしました。秋^{あき}には、黒い^{くろ}いちごを かごいっぱいにとりました。春^{はる}には、すーぷにするいらく^{いらく}きのあたらしいめをつんだり、さとうがしにつかう、野ばらのやわらかいくきをとったりしました。

この四ひきの小ぶた^このことは、だれもがしていました。四ひきは、いけがきのそばをぶらぶらあるいて、うたづぐみのすをのぞきこんだり、大^{おお}声^{こゑ}をあげて うさぎをおどしたりしました。サムはいつも、いちばんうしろをあるきましました。

ときどき、四ひきは、なんキロもあるいて、あれ野^のまでいきました。あれ野^の

には、わたりがらすをつくっていました。あれ野の小川にはかわうそがい
ました。四ひきのぶたは、ひーすをきりとして、ほそいくきでたばねて、うち
までもってかえました。

「ひーすでつくったべつどぐらい、ねごちのいいべつどはないわ。」アンは、
うすむらさきのひーすの花をつんで、しきぶとんにつめながりました。よ
くはずむひーすの花は、とりのはねのべつどよりいいので、アンは、まっとれす
にあたらしいひーすの花をつめかえて、ねられるように もうふをかけました。
夕方、四ひきの小ぶたは、いろいろなあそびをしました。うすやみの中で
かけっこしたり、林の中でかくれんぼをしたりしました。ほしがあらわれ、月
がおかのうしろからのぼってくると、あなぐまのブロックさんといっしょにな
らんで、げんかんのあがりだんにすわりました。サムが、ばいおりを一きよ
くひきました。ブロックさんは、うまれてから今までの長いあいだに、見たり
きいたりした、ゆうかな小さいどうぶつたちの話をしました。いたちをもの



ともしなかったうさぎの話、たかをせめためんどりの話、おおかみとたたかった犬の話なんかを、ブロックさんはきかせてくれました。四ひきの小ぶたは、ゆうきが、からだじゆうにしみわたって、げんきになってきました。そして、これからは、もうこわがらないといいました。

ある日、あなぐまのブロックさんが、なにかのたばをしょって、もどってきました。四ひきの小ぶたは、なにをもってきたのかと、かけよりました。

「ほら、きみが、森のすみかでつかうようにって、くりすますに、鳥のはねのふとんをあなぐまさんにあげたる。それをもってきたんだよ。」
ビルが、サムにいました。

「かけぶとんよ。」アンがトムにいました。
ブロックさんは、なんにもいいませんでした。
たばねたものをして、草の上にひろげました。



それは、いらくさからとった糸いとでおった、みどり色のぬいの地じでしたが、とてもよくできているので、まるであさのぬいのようでした。じょうぶで、その上、いらくさのとげなんか一つものこっていませんでした。

ブロックさんは、ぼうを二本ほんもつてくると、地じめんにつきたてました。それから、いらくさのぬいのを ぼうの上うへにかぶせて てんてんをつくり、小ぶたたちこぶたたちが中なかにはいれるように、入り口ぐちのたれまくをあけてやりました。

「ほしいと思おもってたんだ！」と四ひきの小ぶたはそうさけんで、小こさなみどり色の家いえにもぐりこみました。「ねえ、ブロックさん、この中なかでくらしがいい？ここでねむっていい？」

「おちついて、おちついて！」年としとったブロックさんが、わらっていいました。「そうたくさんいっぺんにきくもんじゃない。その中なかでねてもいいし、それを野原の はらへもって行って、きゃんぶをしたっていいんだ。やってみたかね？」

「いいの？ えっ、いいの？」小ぶたたちは、てんてんの中なかではねまわり、ぴよ